島崎さんのこと

安原　茂

島崎稔さんが急逝された。新潟県吉川町の調査を御一緒にしてからの永い御付合いであり、また、近いうちに農村調査をともにしようという計画をたてていたときのことであっただけに、私には衝撃であった。

三月半ばごろ、肺に水がたまって入院された島崎さんは、水を抜いたあとかなりお元気になり、ベッドの上に書物を並べて、5月の地域社会学会での基調報告である「転換期の都市と農村」の問題について、種々構想を練っておられた。〈都市と農村〉問題は、島崎さんの、おそらく学問的生涯をかけたテーマであった。〈都市と農村〉というのは、島崎さん流にいえば〈資本と土地所有〉の問題であり、島崎さんのはじめてのフィールド・ワークである安中調査は、〈資本・土地所有・賃労働〉の三者葛藤の場であったことは象徴的である。

私自身、吉川町調査のあと、島崎・北川隆吉編集の「現代日本の都市社会」執筆に参加させて戴き、それ以降都市と農村をたえず視野に収めざるを得なかったのだが、それも島崎さんに触発されたためであったかもしれない。ともあれ入院後しばらくの間はかなりお元気でお見舞の私どもに元気に話をされていた。身体に御負担をかけては、と、一回の面会時間はわずかなものだったが、地域社会研究会での報告については大変意欲的であったようにうかがわれた。というのは、〈都市と農村〉といっても、日本国内にその場を限定せず、アジア地域をふくめ、グローバルな場においてこの問題を検討されようとする、島崎さんにとってはじめての試みであったかのように思われる。そしてそれには次のような経緯があった。

永い間、島崎さんと調査や共同研究を重ねてきた研究仲間、（東京女子大の宮川氏、中央大学の吉沢氏、高知大学の大野氏らその他）は、日本社会の現状分析を課題としてきたが、そして日本社会の位置づけの点では世界的視野を念頭においていたとはいえ、それ自体は一種の前提として立てられているにとどまり、世界社会論は直接には検討の課題とされてこなかったというよう。このなかでいち早く海外観察の機会を経験したのは島崎さんであった。その成果が『ボルゴの民』であるが、この経験は、〈都市と農村〉問題を世界的視点なかで検討すべきヒントを島崎さんに示唆されたように思われる。その後、島崎さんはヴエトナム、吉沢さんはインドネシア、タイ、韓国、小生はタイ、中国など、それぞれに変動期にあるアジア農村に接する機会をもち、島崎宅で開かれるささたかな月例研究会で、これらの観察が紹介されることもすくなくなかった。大野氏も再度のイタリア行の際島崎夫婦と行をともにされてイタリア農村に接する機会をもった。

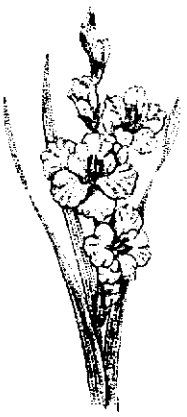
こうして、現代農村問題研究会という名前のささやかな勉強会では中根千枝氏の「社会人類学」などをも読んだりして、アジア農村社会を研究現点のなかにあらためて収めようとしてきており、入院されなければ島崎さんの報告もおこなわれることになっていたのであった。近年、村研の共通課題テーマとして「理境問題」を主張してこられたのも、このような島崎さんの関心の展開と無縁でないのかもしれない。

安中調査から始まり、グローバルな視野からの〈都市・農村〉問題を環境問題と重ねながら把握しようとする現点は、三十余年の学問的生涯の大きなサイクルの後に回帰された新たな端結であったのかもしれない。

三月五日、病院で息がつまり一時危機におちいられたが、迅速な処理で小康をたどられ、三月九日夜、奥さんのおしらせで病床を訪ねた私に、「グローバルな観点から都市・農村問題をやれるのが楽しみだ」と言われて寝まれたとき、その翌日という急逝を私は寸毫も予期することができなかった。

島崎さんは、村研では時潮社版の村研年報時代から年報編集に参加され、つねに、そのときそのときの焦点的課題設定に意欲的に参加され、「農民層分解と共同体解体」を基礎観点とする論点から私たち後進のものは多くのものを学んだが、糸魚川市調査以降の都市論も、都市研究の分野に多くの問題を提示してきた。理論のない実証は、島崎さんがもっとも拒否されたことであった。その「実証」のもつ理論的契機の重要性は、「実証」とは何かを私たちに深く教えるものであったが、それとともにすくなからぬ調査経験をともにした私にとって印象的なことのひとつは、そのいわば〝理論的感性〟ないし〝理論的直観〟ともいうべき対象把握における戦略的焦点の認識のありかたであった。それは旧制二高卒業後はじめ入学されたのが京都大学文学部美学科であり（のち東京大学文学部社会学科に転ず）、そのはじめての論文が「能・狂言」（「文学」一七巻四号）であったことと、無縁ではないのかもしれない。能に示される〝きびしい艶美〟は島崎さんの文体のなかに秘められているのかもしれないとさえ思われる。

「経済評価」に掲載された「戦後農村の階層分析について」に接して、島崎さんの存在を識った私が、当時同じ場所にいた美代子夫人に紹介されて島崎さんにはじめてお会いして以来三〇年の間、島崎さんは折にふれ、頑固な講座派であることを自負しておられたが、その学問の最終課題は透徹した〈戦後日本資本主義分析〉であった。そして、その視点のみちびくままに、ある意味では〈都市・農村問題〉の展開の端緒にたたれたとき急逝された。

村研大会無欠席であった島崎さんがもはや大会に出席されることがない。痛い思いでただ一杯である。

（成蹊大学法学部）